女子短大生のキャリアデザイン

― 卒業後10年のキャリア形成プロセスにみる キャリア教育の役割 ―

和　田　佳　子

はじめに

近年、若者の就労を論ずる際に「キャリア」あるいは「キャリアデザイン」という言葉が、そのキーワードとなりつつある。経済環境や社会システムが大きく変わり、企業が用意したレールに沿って職業人生を大過なく進むことが困難になってきたことから、労働者個人は自らエンプロイアビリティ（employability）を高め、自律的にキャリアを形成していかなければならない自己責任の時代に突入した。しかし、就労環境が激化する中で格差が生じ、フリーターやニート、ワーキングプアーの増加など雇用をめぐる社会問題が続出している。

このことから、政府は1990年代後半以降、若者の職業的自立支援を重要政策課題と位置づけ、矢継ぎ早に若者政策を打ち出している。2003年に日本経団連が提起し、各省庁が共管する形で策定施行された「若者自立・挑戦プラン」は、教育・雇用・産業政策の連携による人材対策の強化を目的としており、学校社会におけるキャリア教育の推進をひとつの柱としている。片や、高等教育機関は、少子化や大衆化によって、学力のみならず意

欲の低い学生の受け入れを余儀なくされている。彼らをどのように育て、ビジネス社会に送り出せるか、その成否が入学者の吸引にも直結することから、大学・短大におけるキャリア教育への関心もここ数年、にわかに高まっている。日本の大学教育に精通するドイツの教育学者カール・ノイマンは、「伝統的でフォーマルな学習における知識や能力の伝達と並んで、職業活動遂行のための行為能力を伝達する学習によって能力の発達が実現されることを、大学教育のイノベーションの出発点とすべきである」（「大学教育の改革と教育学」2005年）ことを指摘している。2003年には、法政大学に日本初のキャリアデザイン学部が設置されるなど、大学・短大のキャリア教育は新たな段階を迎えた。日本の大学702校を対象にした上西の調査（2006年）[1]によれば、既にキャリア教育に取り組んでいる大学（大学院を含む）は64.2%にも上っている。しかも、「取り組みを始めた」と回答した大学の半数は2004年度もしくは2005年度から開始したということである。国公立・私立大学を問わず、また大学院においてさえも、専門分野にかかわらずキャリア教育あるいはキャリアデザイン教育が導入され、2004年に設立された日本キャリアデザイン学会の動きは活発である。このように職業教育システムが、数年前には想像できなかったほどの、大きな関心事となっている。

こうした動向は、高等教育機関が、学生の在学期間に限定した教育責務にとどまることなく、学生たちの長い人生を見据えて生涯にわたって学び、働き続ける姿勢を身につけさせる、いわゆる職業能力の確立と伸長に寄与する社会的責務を担うことを示唆していると捉えることができる。

上述の現状を踏まえて女子短大に目を移すならば、近年の、女性のライフサイクルや価値観の変化、就労状況の変化による卒業後の人生経路の動向に鑑みて、教育内容を見直し・修正することが急務であろう。かつて短大は、「嫁入りのための教養習得の場」として捉えられていた時代もあった。短大で教養を身につけ、数年社会経験をした後に結婚して家庭に入る、

いわゆる仕事腰掛派も少なくなかったと思われる。実際、2003年の和田・椿の調査[2)]でも、「いつまで働きたいか」という問いに対して、女子短大生の25.9%が「結婚・妊娠・出産を機に辞めたい」と答え、「職業継続を希望する」者は9.9%にとどまっていた。これを平成14年度版の女性労働白書に見られる「職業継続を希望する女性」38.0%という数字や「一生仕事と向き合いながら送る生き方を支持する意見が大勢を占めつつある」との分析に照らすと、その意識の差が顕著であった。

しかし、近年の社会状況・家族環境の変化、とりわけ労働環境の変化によって、かつてのような「お決まりのルート」を進むことが極めて難しくなってきている。よって、学生を社会に橋渡す役目を担う短大では、卒業までに就職が決まればよいという短期的視野ではなく、生涯にわたり学び続ける姿勢と変化への対応力を養うこと、つまりキャリアや人生を展望させる教育を実践することがますます重要になるものと予測される。

本稿では、筆者がこれまで女子短大において行ってきたキャリア教育を振り返り、卒業後の彼女たちのキャリア形成の足跡を辿りながら、今後の短大キャリア教育の課題を考えたい。また、今回、卒業生のヒアリングから得た資料を学生向けのキャリアデザイン教材として活用した授業展開例を報告するとともに、本学学生のキャリアデザイン意識についても考察する。まだ始まったばかりの教育分野ではあるが、筆者が担当する本学ビジネス教養課程において、どのようなキャリア教育の展開が可能かを探っていきたい。

1．キャリア教育とキャリアデザイン

(1)　キャリア教育の定義と時代的背景

キャリア教育という言葉は、1971にアメリカで行なわれた教育改革の中で使用されたキャリア・エデュケーションを直訳・導入したものと言われ

ているが、日本における厳密な定義は未だ議論の途上にある。1999年の文部科学省中央教育審議会の答申では、「キャリア教育とは、望ましい職業観・勤労観および職業に対する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力を育てる教育」と定義されている。2002年、文部科学省の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力会議」の中でこの言葉が使用されているが、この際、テクニカルな就職指導的意味合いとしてではなく、生涯学習者としての基盤づくりの意味合いを強調している。つまり、キャリア形成の基盤は生涯にわたる学習によって支えられるものであり、キャリアデザインはいわば生涯学習計画のことであるという捉え方である。

キャリア教育の父と称されているマーランド（S.P.Marland,Jr）は、キャリア教育について、次のように述べている。

「キャリア教育の究極的な目標は、職業教育に従事するものだけなく、全ての学習者のために教育と仕事を統合することにある。生きがいある人間生活、これがキャリア教育の中心概念であり、個々の人間が自らの個性、能力を発揮し伸張することである。・・・（中略）キャリア教育を少ない言葉で定義づけるとしたら、それは教育の学問的体系と職業的発達体系を融合・調和させるものだと言える」（第 2 回職業指導学国際会議、1980）。

また、児美川孝一郎は、日本のキャリア教育の遅れの原因は、戦後の日本の教育が職業世界や労働市場からは相対的な自立性を持ったシステムとして発展してきたがゆえに、職業的レリバレンス（関連性）を必ずしも強くは意識してこなかったことにあると述べている（2006年 6 月の日本キャリアデザイン学会第 3 回研究大会「教育学におけるキャリア研究の到達点と課題」）。

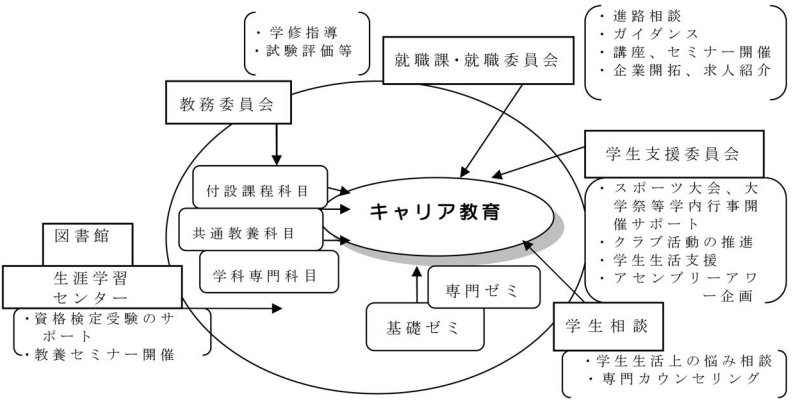
学校社会から産業社会への移行・接続がスムーズに行われない場合、適切なキャリア形成を妨げる結果につながり、日本の将来を担う人材の確保も危うくなることを懸念し、学校段階からのキャリア教育の実施が社会か

ら強く要請されるようになってきている。兼ねてから指摘されている学校社会と産業界の乖離を修正すべく、インターンシップやトライアル雇用などが盛んに行なわれている。こうした背景の下に、若者の職業自立支援を基礎とするキャリア教育の推進は、産官学共通の課題として今後ますます強化されるものと考えられる。

⑵　本学教養学科におけるキャリア教育の考え方（ビジネス教養課程の教育の仕組みから）

まず、筆者が担当する教養学科・ビジネス教養課程の立場から、本学におけるキャリア教育の位置づけを整理してみる。教養教育（伝統的な学問的学習）と職業教育（実務教育）の融合を目標とする、本学教養学科の共学システムを、キャリア教育の視点でまとめると下図のようになろうか（図表１）。

図表１　キャリア教育からみた学内組織関連図



⑶　ビジネス教養課程における授業づくりの工夫

本学ビジネス教養課程では、①現代社会におけるビジネスの基本的な考え方を理解し、積極的に社会参画する意識を育てること、②ビジネス社会

で不可欠となる自己表現力およびコミュニケーション能力に磨きをかけること、さらに③物事に柔軟に対応できる力を身につけ、自律的キャリア形成の意識を高めることを目標としている。理論と実践を統合し、学生たちの社会理解を促進するため、また学生たちの関心と意欲を喚起するために、以下のような教授法を試行している。

① 座学だけではなく、できるだけ参加型の演習形式の授業にする

講義科目であっても、シート記入、グループディスカッションを適宜取り入れ、聴くだけで終わらないように工夫している。演習科目では、発表（スピーチとプレゼンテーション）に力を入れ、「オフィス実務」では電話応対・接遇ロールプレイ、会議演習など、体験・参加型の授業を行っている。

② 学外での見聞を広げ、教養とソーシャルスキルを身につける機会を作る

学外研修（先輩講演会、テーブルマナー講習会）や外部主催シンポジウムへの参加の機会を設け、教室を離れた社会的学習の場を設けている。また舞台観劇、美術鑑賞など、芸術文化へのアプローチも試みている。

③ 各種コンテストなどに参加・応募させ、経験よる自信をつけさせる

希望者には、学生プレゼンテーションコンテストに出場させ、他大学の学生たちとの交流をさせたり、学生エッセーコンテストに応募させるなど、学生時代ならではの、積極的な社会的活動体験を促している。

④ 企業の方々と接触する機会を作り、ビジネス社会の現実を理解させる

学内型インターンシップを企画し、銀行やホテル、ＩＴ企業などによる出前型インターンシップに参加させている。また、経済産業省等が主催する見学型・プロジェクト型インターンシップへの参加を促している。さらに、働く先輩から生の話を聞けるように、卒業生との接

触機会を設けている。

⑤　教材の開発

授業用のレジュメはもとより、学生のレベルとニーズに合わせた手作りテキストを作成し、改訂を続けている。

2．短大卒業後10年を経過した卒業生への聞き取り調査

筆者がこれまでキャリア教育担当者として関わった30代の卒業生13名の協力を得て、卒業後のキャリア形成プロセスと学習の現状を聞き取り（シート記入とインタビュー)、それらをモデルデータとして分析した。ヒアリング対象者のプロフィールは図表２のとおりである。

図表２　ヒアリング対象者一覧

対象者		年齢	プロフィール
1	Ａさん	37	オフィス機器製造業施設課主任（東北)、既婚、子供３人
2	Ｂさん	33	外資系宝飾販売業　販売員（東京）　離婚後再就職、子供なし
3	Ｃさん	30	菓子製造販売業　百貨店内店舗チーフ（札幌）未婚
4	Ｄさん	31	私立大学事務局　総務部人事課スタッフ（東京）未婚
5	Ｅさん	33	空港ターミナルサービス（契約)（東京）　離婚後再就職、子供2人
6	Ｆさん	32	ケーブルテレビ会社　Ｅコマース事業部課長代理（東北）未婚
7	Ｇさん	33	航空業（客室乗務員)（東京）未婚
8	Ｈさん	32	ホテル業　フロントスタッフ（札幌）未婚
9	Ｉさん	31	地域開発会社（契約社員)、日本語教師を目指し専門学校通学中。未婚（札幌）
10	Ｊさん	30	建設会社事務から転職、様々な仕事に就く。レストランのホールスタッフを最後に結婚退職。現在、妊娠中。(旭川)
11	Ｋさん	30	化粧品販売会社美容部員、道内トップ店舗のセクションチーフを経て結婚を機に退職。家庭と両立できる仕事を模索中。(室蘭)
12	Ｌさん	30	医薬品卸業、事務員として９年勤務。結婚退職で現在、妊娠中。(釧路)
13	Ｍさん	32	航空業（客室乗務員)（東京)、未婚

調査項目は主に、①現在の「学び・活動」の取り組み状況、②短大時代の学びと卒業後の学びの違い、③今後の学びプラン、④短大キャリア教育への期待とした。さらに、卒業後10年余のライフ・ヒストリーを「学び・活動」を中心にシートに記入してもらった。

結果の考察：

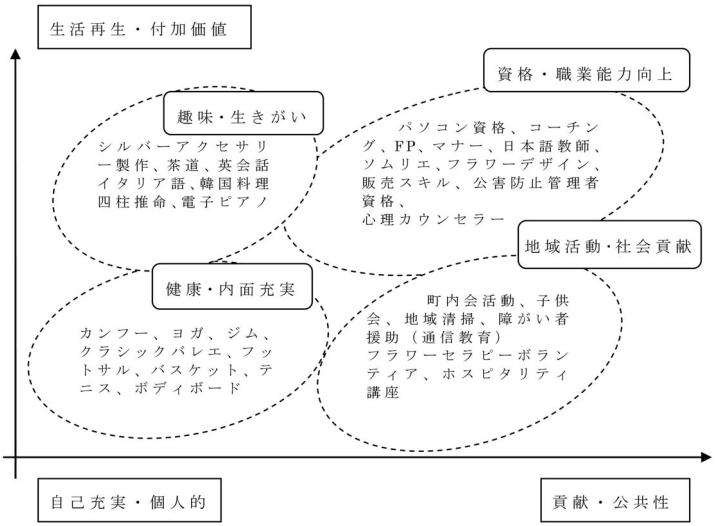
⑴　短大卒業後の学習状況

現在、「学び・活動していのるものは何か」という質問に対しては、健康維持を目的とするものから職業能力開発に資するものまで多岐にわたっており、大まかに分類すると図表３のようになる。

学びの理由は、「知識や教養を高める（内面を充実させる）」が最も多く、「生きがい・自己実現に向けて」、「趣味・楽しみ」、「健康維持のため」と続く。30代では、「交友関係を広げる・社交性を高める」という理由は聞かれなかった。「現在は何もしていない」2名（離婚からの自立に向けて努力中の人、家族に起因する問題で経済的に建て直し中の人）を除くと、既婚・未婚を問わず平均３つの学習・活動に取り組んでいることになる。

現在の学習環境については、全員が「満足していない」と答えている。その理由のトップには、「活動時間の不足」を挙げている。続いて、「（交

図表３　ヒアリングにみる、卒業10年後の学び・活動の状況



通の便が悪いことも含め）身近に学習できる場が少ない」こと、やりたいと思うことには「費用がかかりすぎる」ことがあげられている。他に、「情報が不足している」と答えている者もあり、これも日常の生活の多忙さを物語っているものと考えられる。職場における研修・学習機会の少なさを不満に思う人は1名しかおらず、むしろ企業内で、常に研修に追いかけられている様子が数名から聞かれた。

学びに活用する媒体としては、「新聞・雑誌・専門書などの出版物の活用」が最も多く、「テレビ・ラジオの教育番組の活用」がそれに続く。民間のカルチャースクールまたは個人開業の教室に通う人がほとんどで、公共機関の講座を利用している人は今回の調査では皆無であった。eラーニングや通信教育を利用している人もおり、ここからも時間のやりくりを工夫する姿が浮かび上がってくる。

短期大学におけるリカレント教育に対しては、全員が興味を示し、期待度の高さが感じられた。内容については、「子育て後の再就職に役立つ講座」、「資格取得に連動する職業訓練に連動する講座」、「一般教養の学び直し」が上位にあがり、「生活技術に関するもの」は現在充足しているためか希望は少なかった。

⑵　短大在学時と卒業後の「学び」の違い

短大時代の学び方と現在の学び方の違いについては、「短大時代は高校の延長線で受身の学びをしていたが、卒業してからは目標が明確になり、学ぶことの重要性とありがたさを感じて意欲的になった」と答える人がほとんどである。特に、「30代になって教養が必要だと感じ、学びの質が変わった」という回答が印象的である。学生時代には、現在の学びが、将来の自分にどう影響するかがイメージしにくいため、キャリアデザインという概念とともに、学びの意味を学生に伝えていくことの必要性が示唆されたように思う。個々の記述は以下のようなものである。

＊丸暗記から理解型の学習方法へと変化した。短大時代は目標がなく、学歴さえ手に入れたら結婚するまでのつなぎになるだろうくらいの考えだった。学ぶ環境の少なさ、時間の少なさを痛感し、学ばせていただけることをありがたいと思えるようになった。

＊短大時代は「勉強する」ことで精一杯。具体的な学びの影響が、自分をどんな風に変えるのか、イメージがなかなかつかめなかった。卒業後は自分に足りないもの、目指すものが明確になって初めて「これ」というものを学ぶ気持ちが増した気がします。

＊もっと自分と真剣に向き合っていればよかったと思う。自分が好きなもの、興味あるものは何なのか、もっと早くに真剣に考えておけばよかった。この年齢になっても、はっきり人生の方向が決められず、何をしたいのか目指すものがないまま、流されて生きている。社会に出て色々な人と出会い、自分よりもかなり若い人でもしっかりとやりたいこと、目指す方向を定めている人を目の当たりにして、つくづく感じるようになった。

＊短大時代は高校の延長線で受身の勉強をしていたと思う。自ら学ぶのではなく、学校へ行ったので勉強したという感じ。今振り返れば、資格をきちんと取っておけばよかった。特に英語とフランス語、パソコンも身につくように学べばよかったと後悔している。

＊お金を払うか払われているかの違い。学生時代は受動的で甘えた姿勢があった。卒業後はプロ意識が働く。学ばないと前に進めない。

また、短大時代に学んでおいて良かったと思うこととして、付設課程で学習した秘書の授業（＝狭義のキャリア教育）と答える人が多かった。「秘書課程で学んだことが大変役に立ちました。基本的な所作、言葉遣いなど、実践的な学修を経て社会に足を踏み入れることができたことは、自信につながりました。学生のうちから社会人としての基本は学んでおくべきだと思います」、「敬語や言葉づかい、電話の応対やビジネス文書など社

会に出てすぐ役立つ実践的な内容であり、マナーや身のこなしを学びながら、実は自分と向き合い、内面を知るような学びであり、現在の自分にプラスになっている」などと回答している。

＊とても役立ったと実感しているのは、付設課程で学習した秘書の授業です。敬語やことばづかい、お茶の入れ方、電話応対、ビジネス文書など社会に出てすぐ実践で役立つ内容でした。

＊秘書課程の授業で、社会に出ている先輩たちのお話を聞く時間があったことは良かったと思います。

＊短大時代は、先生がいて、仲間がいて、自分が求めればいくらでも学ぶことができました。それは大変貴重なことだったように思います。やはり秘書課程で学んだことが大変役に立ちました。基本的な所作、言葉遣いなど実践的な学修を経て、社会に足を踏み入れることができました。学生のうちから社会人としての基本は学んでおくべきと思います。少子化などもあり、益々即戦力が求められると思うからです。

＊短大の学びはお手本がありレクチャーされるもの（受動的）。卒業後はほとんどが実践（行き当たりバッタリ）で、自分で習得していかなければならない（能動的）。しかし、今思えばマナーや身のこなしを学びながら、自分と向き合い、内面を知るような学びがあったことが、今の私にはプラスとなっています。

一方、短大時代に学んでおけば良かったと思うこととしては、英語などの語学を挙げる人が多い。他には中国語、パソコン、経済や経営が挙がっていた。現在の生活の時間不足を考えれば、たっぷりあったはずの時間を有効に使えなったという思いからであろう。「社会人になると、自分の意思だけで学びを求めるのは難しいと思います。アフター５や有給を自由に使って学べる職場はわずかで、サービス残業や休日出勤も断れない現状です。人は死ぬまでが学びです。嫌なことでも、学んだ後は全て財産ですが、誰もが、学びたいことを学びたいときに学べる地域社会づくりは可能だろ

うかと思うところです」との回答がその思いをよく表している。

＊学んでおけばよかったと思うのは語学。英語でも中国語でも1カ国語を習得しておきたかった。

＊短大時代、あんなに時間があったのに、もっと勉強しておけばよかったと思いますが、社会に出てカラーやフラワーなど興味を持ち、夢中になる学びは短大時代にはなかったなと思います。結局、（専攻した）英語とはかかわりのない仕事に就いたため、英文学ばかりでなく、社会に出て日常や役に立つ学びをもっとしておけばよかったと思いました。例えば英会話やパソコンなど。

＊短大時代は、将来を役立てたいという思いで科目を選び学んでいたと思いますが、社会に出てからは、さまざまな物事に触れた上で、仕事に役立つもの、ライフワークにして追求したいものを学ぶという違いがある。経済や経営についてもっと学んでおけばよかったと強く思う今日この頃です。

⑶　今後の学びプラン

将来に向けての学習計画については、個別性が高く内容はバラエティに富んでいるが、「知識欲は学生時代よりも高くなっているので、少しでも興味ある事にはチャレンジしたい」と答えるなど、概して学習意欲が高く、出産・子育て時期にあっても、５年後を見据えて勉強していたいと答えている。仕事をする上で必要となるスキルを向上させたいという人もいるが、楽しいと感じる学びを志向する意見も目立った。

具体的には、仕事に必要なＰＣの関数、資産運用、日本語教師、心理学関係の資格、イタリア語などが挙がっていた。

＊日本文化と日本語、日本社会について学び、諸外国の人々に日本の姿を伝えたい。ゆくゆくは外国人の方が気軽に通学できる日本語学校の経営と運営をしたい。

＊40代、50代を第二の職業生活にしたいと思い、少しずつ心理学などの勉強を始めている。初めからゴールを50代くらいに置いたので、かなりのんびりペース

だが、何とか夢を叶えたいと思う。

＊これからもずっと学び続けていきたい。常にアンテナを張り、少しでも興味ある事にはチャレンジし、「やっぱり、これ！」というものを見つけて次の仕事に就きたい。今は結婚したばかりで、出産・子育て中心ですが、5年後を目標にして、たくさんのことを吸収しておきたいです。

＊今は妊娠中ということもあり、出産・育児を通して多くのことを学び経験したいと思います。身勝手な大人が増えて、嫌な事件が多いですが、子供たちに社会のルールや自立心、思いやる心などを身につけさせる手助けをしたいなどと生意気なことを考えています。

＊学校に通うには時間もお金も余裕がないので、テレビなどで学びます。

＊販売、接客スキル、店舗運営のスキルを学び、人の心と数字を動かせる人になりたい。

＊これまで資格取得などの学びイコールできる女性などと勘違いしているところもありました。しかし、今は楽しく学びたい、生涯にわたり自分を成長させてくれるもの（趣味など）、生きていて楽しい、学んでいて楽しいというものに出会えたらいいなと思います。

＊知識欲は学生時代よりは強くなっており、興味があること、学びたいことが多いために、かえって一つの方向に絞れず悩んでいます。

⑷　後輩あるいは短大教育に期待すること（学生時代に備えておいてほしい資質・能力）

学生時代に備えておいてほしい資質・能力は何かという問いへの回答は、「社会常識」「素直さ」に集中した。「人の話をきちんと聞く子が求められます。自分の意見を持っていてよいが（無いと困るが）、人の話にも耳を傾けてほしい」や「ただひとつ"素直な人"です。高い能力があり、いろいろな経験があることは素晴らしいと思いますが、会社では、それまで学んだことよりも、新たに学ぶことが重要です。それをしっかり学ぼう、教え

ていただこうと思う気持ちが強い人に入社してもらいたい。学歴で人に対する態度を変える人や、プライドが高くて先輩に教わることのできない後輩が増えてきていて残念です」、「素直な後輩が、一番近くにいてほしい。新卒の方は、失敗することに慣れていないようで、指導をしても受け入れられないように思います。人との接し方、関わり方が未熟です。短大では専門知識のほかにコミュニケーションをベースにした授業があればよいと思います」とあり、職場で後輩指導をする際の苦労が読み取れ、短大で行うキャリアキャリア教育のめざす方向が示唆された。

さらに、「短大教育の中では、自分が社会人として働くということの意味を問いかけてほしいと思います。なぜ働くのか、自分の働きはこうしてお給料に反映されていくのだなど。若い後輩たちは、何も深く考えていないように思います」、「働くことの意味をしっかり理解している人、お給料の出所と、お金を頂くことの意味を謙虚に受け止めることが出来る人に入社してほしい」との指摘があり、まさにキャリアデザインの教育が必要であること思わされる。

＊社会常識のある人。明るく、仕事への姿勢が素直で前向きな人。パソコンを使いこなせる人。

＊粘り強さと心の強さ。やさしさ、人を思いやる心。コミュニケーションの上手さ。

＊創造する力を持った人が望ましい。どうしても指示を待つ人が多く、何かを自ら創り出そうとする想像力が足りない人が多い。この仕事のやり方で良いのかと常に疑いを持って動く人がとても少ないと思う。

＊いろんな意味で「察する」ことが出来る人。いちいち言われてから行動するのではなく、察しながら行動できる人。

＊我を抑えてコントロールできる人、非があれば、素直に認めて謝れる人。礼儀ある人。

＊素直な後輩が、一番近くにいてほしい。新卒の方は、失敗することに慣れてい

ないようで、指導をしても受け入れられないように思います。人との接し方、関わり方が未熟です。短大では専門知識のほかにコミュニケーションをベースにした授業があればよいと思います。

＊一般常識を持っている人。学歴重視ではなく、社会人として必要なことを備えている人を重視したいと思います。

＊働くことの意味をしっかり理解している人、お給料の出所と、お金を頂くことの意味を謙虚に受け止めることが出来る人。資格や経験・お金は後からからついてきます。

＊権利や待遇ばかりを主張しない人。

＊冷静かつ客観的なものの見方、判断能力を備えた人、バランス感覚を持った人

⑸　短大卒業生のキャリア形成のプロセス

次に、キャリア形成のプロセスを見るため、調査対象者に短大卒業後10年のライフ・ヒストリーを記載してもらった。記載項目は、以下の 3 項目とし、備考欄にはそのときの思いなどを綴ってもらった。

①プライベートでの出来事（就職・転職・結婚・離婚・出産など人生の契機や家族の状況など）

②仕事にかかわる出来事（アルバイトも含めて、どんな仕事をしたか、配属・配転で身についた技術・技能など）

③学び・活動の経験（資格取得、講座や研修受講、趣味や習い事、地域活動、大会やイベント参加、影響を受けた人との出会いなど）

結　果：

短大卒業後10年のライフ・ヒストリーは記載する項目が多く、決して容易な作業ではなかったと思うが、回答してくれほぼ全員が、「シートに記入することによって自分の人生の振り返りになりました」、「ちょうど良いタイミングで"課題"をいただきました」、「手を抜きつつある自分を見透か

されているようなタイミングでシートが届きました」、「記入するのが楽しかったです」、「将来を構想するために、過去の振り返りが役に立ちました」などの前向きなコメントを付け、これらの言葉からも改めてキャリアデザインの重要性が確認できた（記載事例は資料参照）。

このシートから読み取れることは、入職後に与える短大キャリア教育の影響が少なくないということである。影響を受けた人物として短大教師との出会いに触れてくれる人も多い。少数からの聞き取りではありながら、配転、転職、結婚、出産、子育て、離婚、再就職、心理的な病による入院・療養など、30代に起こりうる女性のライフイベント上の課題が現れていることも興味深い。

(資料)ﾕ大～卒業後の「学び」を中心としたライフ・ヒストリー　ケース①未婚・キャリア形成型（Ｃさん）

年代（年齢）	プライベートでの出来事 （入学・卒業、就職・転職、結婚・出産など人生の契機や家族の状況など）	仕事にかかわる出来事 （アルバイトも含めて、どんな仕事でどんな訓練を受けたか、配属・配転、身についた技術・能力など）	学び・活動の経験 （資格取得、講座や研修受講、趣味や習いごと、語学学習、地域活動、大会やイベント参加、影響を受けた人との出会いなど）	備考・コメント （そのときの思いなど）
18歳～	短大に入学 親元を離れて一人暮らし。	・ラーメン店でアルバイト。ここの家族との出会いの影響は大きい。 ・ホテルの売店、お菓子やなどで短期アルバイト	・ラーメン店で働くことの楽しさを知る。お金を得ることだけが仕事ではないことに気づく。 ・恩師との出会い、たくさんの助言をいただく。 ・ホテルのアルバイトで顧客至上主義の大変さを知る。	・自分に過度な自信があった。青かった。
20歳～	短大を卒業 大手下着販売の会社に就職するも、1ヶ月で退社	・貪欲な販売姿勢についてゆけず、自分の実力のなさから挫折。		・下着会社の退職を、会社のせいにしていた自分。今考えると、甘すぎる。
22歳	百貨店内の菓子店に就職 現在に至る	・アルバイトとして入社後、4ヶ月で正社員になる。 →別な店舗に異動	・情に溢れながらも、厳しい店長との出会い。自分の欠点をはっきり指摘してもらえたのは、ありがたかった。 ・テナントとしての百貨店のかかわりの難しさを知る。	・初めて壁にぶつかり、仕事ができると思っていた自信を一気に失う。精神的に負けて逃げ出しそうになったこともある。 ・フラフラになりながらの勤務。
23歳		新規オープンの店の立ち上げの際、売り場責任者となる。	・仕事のできる、店舗管理マネージャーとの出会い。精神的なバックアップと、スキルアップを厳しく指導してもらった。	・初めてお店を任されて、徐々に視野が広くなった。四角い考え方が少し丸くなった。 ・一度、精神的につらくなって辞めようと思ったときには、強く引きとめていただいた。
25歳		Ａ百貨店に異動（店長となる） チーフに昇格。	・月に1度の研修（コンサルトの先生を招いて。内容は主に、ホスピタリティの分野）	
28歳		新店舗オープン立ち上げのヘルプ	・女性チーフとの出会いにより、仕事に対する価値観が大きく変わる。 ・月1～2回のコーチング「気づき」がテーマ。	・店を守り、運営していくことの厳しさと楽しさを実感している。 ここにはあげ切れなかったが、たくさんの方たちとの出会いと教えが、私を支えてくれている。
30歳		駅前3店舗の統括マネージャー	・店長職の人たちと初めての海外。フランス・イタリア7日間研修	・30代中には結婚したいと考えている。「働く主婦」として頑張り、後輩に夢を与える人になりたい。

短大～卒業後の「学び」を中心としたライフ・ヒストリー　ケース②家庭・仕事両立型（Ａさん）

年代（年齢）	プライベートでの出来事 （入学・卒業、就職・転職、結婚・出産など人生の契機や家族の状況など）	仕事にかかわる出来事 （アルバイトも含めて、どんな仕事でどんな訓練を受けたか、配属・配転、身についた技術・能力など）	学び・活動の経験 （資格取得、講座や研修受講、趣味や習いごと、語学学習、地域活動、大会やイベント参加、影響を受けた人との出会いなど）	備考・コメント （そのときの思いなど）
18歳～	短大に入学 （英文学科）	バスの添乗、洋服店店員、家庭教師、試食のお姉さん、本屋、飲食店など10種以上の異業種を転々としながらひたすら生活費を稼ぐ。	秘書検定３級取得 秘書士取得 恩師との出会い。 ・学校の短期留学に友達に流されるまま参加したが、これをきっかけにあらためて語学に興味を持って、授業が楽しくなった。 フランス語の授業は厳しく、大学は学ぶところだ！っと我に返る。	卒業後、奨学金を自分の給料から支払うのがわかっていたので、授業をサボるのがもったいなくて学校には行っていました。が、あまり優秀とはいえなかった。 余暇はすべ友人宅へ遊びに行き、旅行気分で、景色を見ては泣き、動物を見ではしゃぎ、植物の違いを見ては感動し・・っと毎日がとても充実していました。
20歳～22歳 就職	短大を卒業 就職	都会はいやだと地方の製造業へ就職。人事課配属 新卒採用を担当し、緊張している受験生に同情。	・企業が必要としている人材・会社の仕組みや給与事情など勉強になる。しかし秘密が多く、仕事内容を同期に愚痴れず悶々としながら過ごす。英語研修・新入社員研修(接遇・PC)受講 ・英語で工場案内（ほとんど片言）がうまく出来ず能力不足に落ち込む毎日。	１人暮らし、弟が近くの大学へ入り、援助や自分の生活でいっぱいで、ひたすら労働。なれないの生活でブルー。２年経ったら転職しようと考えていた。
23歳	人事異動 結婚 妊娠	英語が活かせる海外営業課配属 貿易実務（輸出書類作成、商談文書作成）	貿易実務(通信教育)自学 同時通訳がいる会議に参加、資料は英語、毎日が勉強。	希望部署へ異動になったが、結婚が決まり、続けさまに妊娠。最悪のタイミングで、気まずい雰囲気。 上司には恵まれたが、新婚旅行先でまで取引先と会食。 同僚に恵まれず、人間関係に悩む。
24歳	第一子出産 育児休暇半年で復帰 半年後、また妊娠 姑と同居を決意し、新築同居する（夫と私の共有名義）	施設課配属 庶務業務(伝票処理・届出書類整理・文書の清書)	ペン字(通信教育) パソコンスクール（会社命令で受講）	保育所が待機児童扱いで仕事復帰できず。産休後、育児休暇取得。しかし前例はないし、相談する人もなし給与はマイナスで生活苦と慣れない育児でブルー。やっと復活したら庶務業務になり、飛ばされた気分でどっと落ち込む。
25歳～26歳	第二子出産 実父亡くなる 育児休暇半年で復帰	施設課配属 再度同じ職場に戻る。 （後日談で、男所帯で平然と仕事が出来るのが評価された？為、戻ったらしい。産育休暇明けで同所属へ戻れるのは会社的に稀だった）	通関士(通信教育)修了 スクーリングや講習会参加 貿易実務講座修了 （前職種への復帰を願ってアピールする日々だった）	不本意な配属な割には女性一人の気楽さと、離れた建物で人の目を気にせずに済み、保育所のお迎えも融通が利き、いい職場に来たものだと運の強さに感謝。この頃から会社が好きになる。 大好きな父が亡くなり、人生のプランをたてて後悔のない一生を送ることを決意する。

27歳～29歳	第一子幼稚園入学 第２子　〃	社内ＩＴ環境の変化で新しい仕事が山積みで、それなりに充実。	幼稚園の役員 バスケット・ママさんバレーを始める (若くないことを急に自覚し、突如スポーツに取り組み始める)	仕事と子育ての両立でほとんど記憶なし。仕事が息抜き。 ママ友達との本音を隠した付き合いに結構疲れる。
29歳～30歳	第三子出産	産休と育児休暇（２ヶ月） リストラ(セカンド・ライフプラン)が施行され、社内の50歳以上の女性がほとんどいなくなる。 施設課配属	小学校役員 幼稚園役員 健康と美容が気になる 健康食品、美肌がこれから先、洋服と呑み代とかわり、投資額が大幅に増える。	組織変更で合わない部長がきて、飛ばされそうになるが、産休で難を逃れる。会社の組織の壁、派閥、色々見えてきてうんざりしてくる。不景気に会社の不調、ネガティブな考えに落ち込む。 三度同じ職場に戻る偉業（？）を達成。
31歳～33歳		定型業務のみならず特命事項もまかされ、人を使う難しさを感じる。	バンジージャンプで厄払い 公害防止管理者(水質)合格 家庭婦人バスケットボール大会に参加	厄払いにバンジージャンプを飛び、自分の勇気に感動。死ぬ気でやれば何でも出来るかも！っと自信がついた。
34歳～35歳	第三子幼稚園入学	その職場で天下を取るには、人・物・金を押えることだと思い、人事権がないので、自分が課長になることを目標とし、組織や経営会議の報告などに注意を払い、広い視野を持つ努力を始める。物・金は本部の固定資産、事業計画(予実績管理)を一手に引き受け、仕事量は倍になったが改善、改革業務が増えて楽しくなってくる。	フランス一人旅にでかける。 乗馬を習い、ライセンス取得する 公害防止管理者(大気)合格 フットサルを始める	人生の転機。 子供、仕事、結婚で失ったものばかり後悔していた気持ちが一掃された歳。私が死ぬまでやりたかった事は何だろうと問い掛けた時、①マイホームを自分の設計で建てる②ルーブル美術館とベルサイユ宮殿でゆっくり過ごす③乗馬を習う④エジプトへ行く⑤冒険家になる⑥自分の遺骨を宇宙に撒いてもらう・・時間が無いことに気付き焦り始める。
36歳			子供会役員 スポーツ少年団役員(長男)	息子の学校から呼び出されたり、近所の過干渉な親たちからの苦情電話でブルーになる。 長男を一人でフランスへ9日間私の友人宅へ行かせる。親として手放す不安と成長に感動 息子達の成績不振に子供の頃の自分を思い出し、注意ばかりの日々を反省。
37歳	第一子中学入学 第三子小学入学	施設課主任になる。 役職がつき、与えられる仕事が変わってくる。 34歳で気付いたことによって結果が出てさらに頑張ろうと思う毎日。 反面、目上の先輩を使う難しさ、男の嫉妬は根深い事に閉口。でもお局はそれなりに強く成長したのでした。	子供会役員 スポ少役員(次男) 主任教育 公害防止管理者（騒音振動）受験 ファイリングデザイナー受験予定 ・乗馬スクールは一年で辞めたので（やはりお金持ちのスポーツ、貴族でない私には経済的負担が大きく長期で通うのは無理でした）単発で気晴らしに乗馬を楽しむ バスケットは継続して続けています	私生活と仕事の両立で毎日気絶した様に寝る日々。やりたかったリスト④エジプト行きに向けて500円貯金をする日々。長男はサッカー、次男はバスケットで頑張っている姿に負けられないと思いつつ、成長した子供3人に、きちんとした生活をしろと注意される毎日。主人は私のしたいことに反対はしない。自己責任で・・との考えでいる。やっと自分の選択(結婚)は間違って無かったかもと思えるようになってきた。

短大～卒業後の「学び」を中心としたライフ・ヒストリー　ケース③結婚→離婚→再就職型（Ｅさん）

年代（年齢）	プライベートでの出来事 （入学・卒業、就職・転職、結婚・出産など人生の契機や家族の状況など）	仕事にかかわる出来事 （アルバイトも含めて、どんな仕事でどんな訓練を受けたか、配属・配転、身についた技術・能力など）	学び・活動の経験 （資格取得、講座や研修受講、趣味や習いごと、語学学習、地域活動、大会やイベント参加、影響を受けた人との出会いなど）	備考・コメント （そのときの思いなど）
18歳～	短大に入学	・ファミリーレストランでアルバイトをする。	・英語科に入学、恩師との出会い ・短大ではテニス部とＥＳＳを掛け持ち ・ミスユニバース北海道大会に応募（１次審査通過）	・航空関係の仕事に就くため、英語の勉強をがんばろうと思った。 →２次審査が英検と重なり、英検を選ぶ。ミスユニバースに挑戦していたら・・と思うこともしばしば。
20歳～	短大を卒業 エアラインの会社に入社（グランドスタッフ）	1年目：ゲート、チェックイン業務 2年目：発着業務 3年目：新人のＯＪＴ担当	・運転免許取得	・夢だった仕事ができる！と張り切っていた。
23歳 24歳 25歳	夫と出会う 結婚 退職 第1子出産→夫が家出 夫の転職とともに本州に引越し。 夫の借金が発覚。			・職場の人間関係が嫌で、結婚してもいいかなと考え始める。 ・夫のギャンブルによる借金に苦しめられるが、子供のために頑張ろうと思った。
28歳 31歳	長男　幼稚園入園 第２子出産 長男小学校入学 次男、保育園へ	・夫の借金返済のため家で内職を始める。 ・以前勤めていた会社の上司から声をかけてもらい、羽田のエアライン会社に派遣で入社。	・空港本部の所長や取締役の方との出会い 励まされ、働くモチベーションとなった。	・２人目を妊娠し、これで夫のギャンブルは止まるだろうと期待した。
32歳	夫の借金問題と女性問題で離婚調停	・エアライン2社（契約）かけもちで働く ・子供がいるためシフト勤務に入れず、できる仕事が限られる。	危険物講習を受ける。	・子供は私が育てる！と離婚を決意。今は別れて良かったと思う。ただ、苗字を変えなかったが、今となれば、変えておけばよかったと後悔。
33歳	長男を実家に預ける		空港内運転免許を取得。	・長男の子育てはしばらく実家の母に任せる。とても寂しいことではあるが、私はまずは自立を目指そうと思う。今は与えられた仕事をしっかりとこなし、空港業務のプロとして食べていけるまで頑張る。プレッシャーあり。

３．卒業生のライフ・ヒストリーを活用した「キャリアデザイン授業」の展開例

続いて、上述の卒業生が記載してくれた「短大卒業後10年のライフ・ヒストリー」をもとに、短大生向けのキャリア・デザイン教材を作成した（資料）。Ⅰ．未婚キャリア形成型（Ｃさん）、Ⅱ.家庭・仕事両立型（Ａさん）、Ⅲ.結婚→離婚→再就職型（Ｅさん）としてライフコースのケースを示し、本学教養学科ビジネス教養課程2年生（後期）「オフィススタディ」の授業（35名）の中で事例検討し、グループディスカッションを行った。短大卒業後10年のあいだに、仕事で、あるいはプライベートでどのようなことが起こっているのか、どのような人と出会い、転機にはどのような判断を下すのかなど、ライフ・ヒストリーが描かれたシートを丹念に読みあげ、そこで感じたこと、考えたことをまとめさせた。時間が来ても話が尽きないほど、グループ内でのディスカッションは盛り上がりを見せていた。その後、グループ内で話し合ったことを全体に向けて発表させ、さらに意見交換を行った。最後に振り返りのシートに記入させ、自分のキャリアデザインを描かせて収束とした。

キャリアデザイン（あるいはライフデザイン）のイメージは、未来の計画を立てることと捉えられることが多い。人生はままならないもので、計画どおりに行くはずもないことから、キャリアをデザインすることについて、かつては計画を立てても意味がないという批判も聞かれたが、現在では計画通りにいかない人生だからこそ、予想を立て、予想通りにならなかったときに備えるという考え方が理解されるようになってきている。とはいえ、弱冠20歳の学生に10年後の自分を想像させることは決して容易ではない。今回、自分とほぼ等身大の身近な卒業生の足跡を辿ることによって、共感力が高まり、イメージ化が容易になったようである。「これからの10年間に、これほど多くのライフイベントが起こることを身近に知り、考えさせられた」、「３人に共通するのは苦境でアドバイスしてくれる助言者を

持っていることだと思った」、「結婚は重大な決断。様々な道を想定しておくことが大切だと感じた」など、先輩たちの積極的な生き方に圧倒されながら様々な感想を漏らし、驚きとともに自分自身への期待も高まったように思えた。キャリアデザインの授業を終えた、学生たちの感想から、キャリアデザインとは、まさに「自分の生き方を意識化する」行為であることが読み取れる。

【ディスカッション後の学生の感想から】

＊働くことは、想像以上に大変なことで、自分の甘さを感じた。仕事と家庭を両立している人はすごい。10年後のことなんか、まだまだ先だと考えていたが、３つの事例を見て、もう目の前にきていることを実感した。細かいキャリアデザインは想像がつかないが、10年先、30歳の自分に思いをめぐらせる時間になった。

＊今回、先輩方の人生を拝見することができ、とても良い機会になったと思う。人の人生がどうあったかは、すごく気になることだが、めったに見聞きすることはできない。この科目をとっていて本当に良かったと思った。３人の人生を見て、みなさんたくさんのことにチャレンジしていることがわかった。

＊先輩たちのライフ・ヒストリーを読んで、これからの10年間には様々なことが起こることがわかった。このことからキャリアデザインの必要性を感じた。目標どおりにスムーズに進むとは限らないが、考えられるだけ、人生について深く考えてみたいと思った。

＊どのケースからも、過去を反省し、目標を持ちながら、これからどういう生き方をしようかと真剣に考えている姿勢が感じられた。それぞれ人生は違うけれど、振り返って気づけることはたくさんあるのだと思う。ライフ・ヒストリーを書くことによって思い出し、初めて気づいたこともあったのではないだろうか。現実を見つめ、これからの生き方を考える良い機会になったのではないかと思った。

＊もともと進みたかった道ではなくても、そのとき、そのとき与えられた試練を

乗り越えて自分なりの人生が歩めるようになることもあるのだとわかった。自分にはこれしかない！と頑固に構えていては、自分が苦しいだけなのかもしれない。夢はもちつつ、柔軟に前に進む。様々なことを想定しておくことが大切だと思った。

＊人生、順風満帆にはいかないものだと思うが、３例とも、的確に助言してくれる人との出会いがあって羨ましいと思った。また、ずっと勉強し続けているところを見習いたい。

＊Ａさんのヒストリーの中に、「自分が働く環境を自分で良くしたい。だから課長となることを目標にした」とあった。私は価値分析で、ネームバリューや地位・称賛は一番不要と答えていたが、もう少し違う見方もできるのかと思った。

＊やっぱり、こうなりたいと思ったのは両立型のＡさんのヒストリーでした。仕事・家庭・趣味をバランスよくキャリアデザインしていきたい。夫でなくてもいいが、良い助言者に出会いたい。そのためには自分の努力が必要なのだとわかった。

＊私は早く結婚したいという気持ちが強かったが、３人のヒストリーを読んで、結婚は女性の人生で最も重大な決断だということに気がついた。相手によって人生が180度変わってしまうこともあるのだなと思った。夫のギャンブル、借金、ドメスティックバイオレンス、離婚など、テレビの中のこととしか考えられなかったが、考えてみれば、自分に近いところでも起こり得るのだということのイメージがつかめた。

＊Ａさんはしっかりとキャリアをデザインしているため軸がずれないのだなと思った。後悔しない人生をと常にキャリアプランを立てて、その目標達成に向けて生きる姿勢に驚きを感じた。もちろん夫に恵まれたということもあるだろう。挫折があってこそ、精神的強さが身につくのだと感じた。

６．学生のキャリアデザイン意識

本学教養学科、ビジネス教養課程を履修している学生を対象に、キャリアデザインに関する意識調査を行った。サンプル数が少なく、データ的な制約のために分析には限界があるが、あくまでも本学学生の実態あるいは、生の声として教育上の参考としたい。

・調査方法：筆者が担当するビジネス教養課程の科目を履修している、１・２年生に対して、無記名式アンケートを行った。

・調 査 日：平成18年11月第２週の「オフィス実務」（１年生）「オフィススタディ」（２年生）講義時間内

・対 象 者：本学教養学科学生96名（ビジネス教養課程を履修している１年生58名、２年生38名）

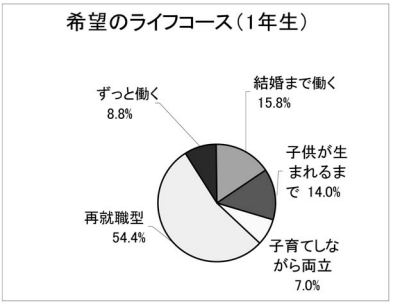
・調査項目：①職業継続の意識と母親のライフコースとのかかわり②やりたい仕事と自覚している適性③職業生活において重視したいこと④職業選択で重視したい条件⑤職場で希望する立場（リーダー、管理職希望の状況）⑥生涯学び続けたいと思っていること⑦短大入学前と入学後の、働き方に対する考え方の変化

調査の結果：

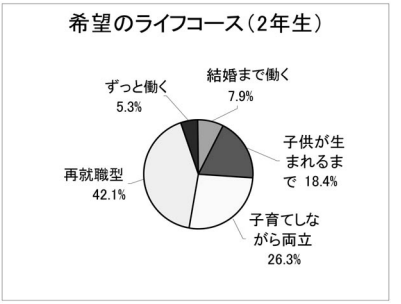
上述のとおり調査対象とサンプル数に制約があり、データ分析には限界があるが、結果には本学学生のキャリア意識の一端が垣間見え、今後のキャリア教育を考える上で参考になるものである。

現時点で「いつまで働きたい」と考えているかという問いに対しては、「子育て期間は家庭に入り、子供に手がかからなくなったら再び働く」という、いわゆる「再就職型」が50.0％と半数を占める。詳細を見ていくと、１年生、２年生で多少の差異が見られ、短大で学ぶ過程で意識変化があることが考えられる（図表４、５）。

図表４



図表５



「自分がやりたい仕事」については、「一般事務的な仕事」「案内・サービスの仕事」に集中するが、これも学年別に見ると動きが見られる（図表６）。就職活動を経験し自己分析を進める中で、あるいは、現実に企業からの内定を得たことによる自己概念の確立により影響を受けるものであろう。

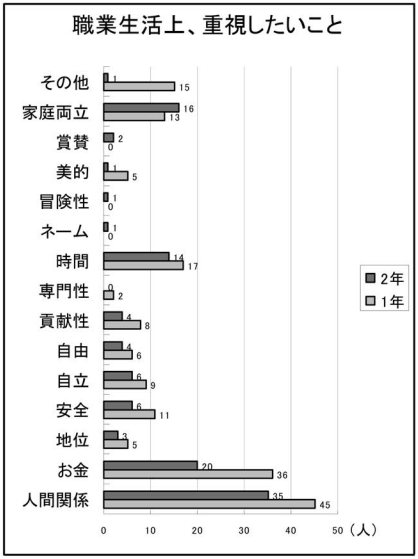
「職業生活において重視したいことは」（複数回答）という問いには、１年生、２年生とも「人間関係」を１位にあげている（図表７）。続いて、「お金」「家庭との両立」「時間」が上位にあがり、個人領域を大切にする若者の姿が浮かびあがっていると思われる。

また、「労働条件として重視するもの」（複数回答）は、１年生で１位が「勤務地」（67.2%）、２位「休日・休暇」（65.5%）、３位「給与・待遇」（59%）であり、２年生では、１位「福利厚生」（76.3%）、２位「勤務地」（65.8%）、３位「給与・待遇」（47.4%）

図表６　　自分がやりたい仕事

やりたい仕事	１年生	２年生
モノを作る	1.7%	5.3%
モノを売る	5.2%	5.3%
一般事務的	27.6%	44.7%
案内、サービス	51.7%	28.9%
企画立案	6.9%	10.5%
教育指導	3.4%	2.6%
その他	3.4%	2.6%

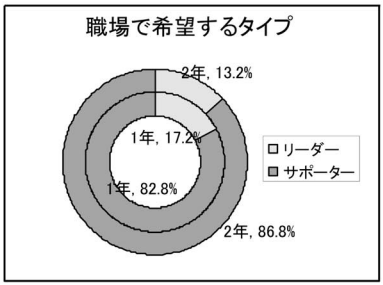
図表７



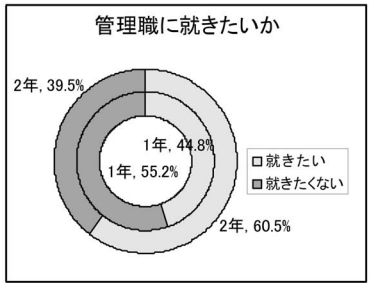
図表８　仕事選択で重視したいこと

	1年生		2年生	
給与・待遇	34	58.6%	18	47.4%
休日・休暇	38	65.5%	15	39.5%
福利厚生	27	46.6%	29	76.3%
会社規模・業績	8	13.8%	3	7.9%
経営者・方針	11	19.0%	9	23.7%
勤務地	39	67.2%	25	65.8%
教育訓練	12	20.7%	5	13.2%

図表９



図表10



（注：外輪は２年生、内輪は１年生）

となっている（図表８）。１、２年生とも、職業選択の条件に「勤務地」をあげる者が65％を超えるところは、大きな特徴と言えるであろう。

職場での自分をイメージするとき、「人を引っ張るリーダータイプを望む」ものは15.6％（１年生17.2％、2年生13.2％）にすぎず（図表９）、「上司や同僚を支えるサポーター・タイプ」を希望するものは84.0％（１年生

82.8%、2年生86.8%）にもなる。その理由として、人をまとめるのは苦手、責任の重いことをしたくないと答えている。

また、「管理職に就きたいかどうか」という質問には、「就きたくない」が1年生で44.8%、2年生で60.5%である（図表10）。これらは、自己肯定感の低さと関係しているのではないかと考えられる。しかし、経営者になるまでがんばりたいという回答も若干ではあるが見られる。管理職に就きたくない、あるいはリーダーになりたくない理由として記載されていたのは以下のようなものである。

＊責任の重みに耐えられそうにないから。責任を持つ自信がないから。
＊そんなにキャリアアップを考えていないから。結婚したら退職するので、特に意欲はない。
＊私には無理だと思うから。
＊偉くなることに魅力を感じないから。
＊人の上に立つのは苦手だから。
＊人をまとめたり、指示したり、引っ張っていくことに自信が持てないから。
＊仕事より家庭を大切にしたいから。
＊役職が就くと退職しづらそうだから。
＊責任が重く、ストレスを抱えそうだから。
＊なりたくないというより、なれないと思うから。

最後に、「短大入学前と入学してキャリア教育を受けた後で、仕事（あるいは働き方）に対する考え方に変化があったか」という質問をした。9割に近い学生が「あった」と答え、代表的な意見としては、「入学前は働くことについて考えたこともなく、あったとしても、とても安易にしか捉えていなかった。しかし、入学後、仕事を得ることの大変さ、仕事継続の大変さと面白さなど、多面的に考えられるようになった」と答えている。

その他の記述は下記のとおりである。

＜ライフコース選択への影響＞

＊結婚するまで働けばよいと思っていたが、今は自分がどこまでできるのか、試してみたいという気持ちになっている。

＊入学前は何も考えていませんでした。学んだ結果、お金を得ることの大変さと意味、ライフコースについても考えるようになりました。

＊働くことへの意識が高まった。働きながら学びたいと思うようになりました。

＊人生進む道の広さを知った。仕事は自分次第で楽しめるものであること。

＊入学前は、結婚したら仕事をやめて主婦になろうと考えていた。しかし、今は仕事をできるだけやってみたいという気持ちがある。

＜働くことの意味＞

＊就きたいと思っていたものは、並大抵の努力では無理だとわかり、ガラリと考え方が変わった。やりたいことではなく、自分に合う仕事をと考えるようになった。

＊大きく変わったと思う。特に内定を得てから、どう働くか、いかに貢献できるかをよく考えるようになった。

＊高校時代は仕事について何も考えていなかった。仕事の大変さと困難への対処の仕方を学びました。働かなくてはいけないという意志とともに、焦りや不安も感じる。仕事はお金だけが目的ではないということ。

＊働くことを安易に考えていた。あのままだったら、恐らくすぐに辞めていたと思います。しかし、短大で学んで、働くことの意味を知ったので、仕事に対する考え方が大きく変わりました。

＜仕事の選び方＞

＊就職したら勉強はしなくてよいと思っていたが、そんなことはないということ。

以前は華がある仕事に就きたいと思っていたが、工場でも頑張れそう。どんな仕事でも自分なりに頑張って認められるようになりたい。

＊OLなんかになりたくない、という気が強かったが、抵抗がなくなった。漠然としていた「働く」というイメージが鮮明になり、最近は働くことの意味について真剣に考えるようになった。

＊働くことの意味をしっかり考えた。なぜ月額、これだけもらえるのか、その額に見合った働き方をしなければならないこと。

＊自分のやりたいことばかり押し通すのではなく、妥協しながらそこから何かを生み出していくこと。それが自分のやりたいことにつながり、良いステップになるということ。

＊やりたいことと、できることには差があること。今できることをしっかりやり、最終的にやりたいことに到達できるようにと考えるようになった。

＊会社の中には、想像以上に多くの仕事の分野があるということがわかった。

＊働くことについての知識が全くなかったが、入学後は真剣に将来について考える時間が増えた。ただ給料がよいとか、名前が知られているという理由で仕事を選ぶのでなく、自分に何ができるのかを考えて仕事を決めたいと思うようになった。

＜ものの見方・考え方の変化＞

＊仕事には、見える部分と見えない部分があること。両側面から判断することの重要性に気づかされました。

＊最初の就職で人生が全て決まるわけではない。状況は自分で変えることができるということ。

＊格好いい仕事をしたいと思っていたが、入学後、いろいろな話を聞いて現実が見えてきた。ただの憧れだけでは、仕事はできないと思う。

＊仕事は約束であり、約束を守ることは人として当たり前のことであるということ。

＊アルバイトと就職を一緒に考えてはいけないということ。自分に向いている仕事に出会うのは、そう簡単なことではない。
＊心構えがとても大事であるということ。外から見える以上に、仕事とは地味なものであるということ。
＊なりたいものにだけ目を向け、仕事を憧れで考えていたが、今は自分が気づいていなかった面も知った上で、仕事を探すべきだと考えるようになった。
＊働くことのメリット、デメリットを知ることで、入学前よりも「仕事をしたい」と思うようになった。
＊入学前は、レールに沿って卒業後働くという浅い考え方だった。今は、その後の人生についても前向きに考えるようになった。
＊どんな仕事でも、必ず意味があるという考えを持つようになった。「どうせ・・・」という言葉を使わないようにしようと思っている。
＊入学前は働きたくないという気持ちが強かったが、今は早く働きたいと思うようになった。
＊受身で人生を考えてはいけないということに気づかされた。
＊受身の仕事しか考えなかったが、仕事は自分で見つけていくものだと感じるようになった。仕事に就くために頑張るのではなく、仕事に就いてからのために頑張るのだと思う。
＊別に就職しなくてもいいと、のんきに考えていたが、可能性を考えて頑張ってみようと思っている。

おわりに

生涯学習者育成の視点でみれば、短大におけるキャリア教育はひとつの通過点にすぎない。キャリア教育を担う立場では、短大2年という短期間に、職業生活で活かせる知識や技能と、自己責任能力やコミュニケーション能力など幅広く社会生活で活かせる力の養成を目標としているが、果た

して、学生が卒業後にこの目標を維持しているものだろうか。

このような疑問から、今回、短大卒業後10年余を経過した卒業生のキャリア形成のプロセスを検証すべく聞き取りを行なったが、結果として、短大キャリア教育の影響は決して小さいものではないことを再認識させられる回答が随所に見られた。また短大卒女子のライフコースが多様化していることや、公私ともに多忙な中でも学ぶ意欲が非常に高いことも確認された。一方で、生涯にわたる継続学習の基礎作りの場としての機能強化について、いくつかの課題も浮かびあがってきた。

個々人が抱える問題は当然ながら多岐にわたるが、短大卒女子のキャリア形成の課題がライフステージごとに、ある程度類型化が可能であることもわかり、変化を追いかけることができる立場にある短大教員の役割として、さらなるキャリア支援の可能性を見出すことができた。具体的には、仕事（または両立）上の悩みや壁に対して、タイミングよいアドバイスを与える役目（メンター）として、また卒業生を対象としたライフステージ別リカレント教育のプランニングも可能ではないかということである。

本学在学生のキャリア意識調査においては、必ずしも女子短大生の職業意識が高いという結果は得られなかったが、これは自己肯定感の低さに起因するものと考えられる。しかし、１年次と２年次では若干の意識差が現れていることは、キャリア教育の影響を示すものと解釈したい。

若者の自立や社会参加を含めた広い意味でのキャリア支援策が拡充される中で、高等教育機関においてキャリア教育が担う役割はますます大きくなり、重要になってくるものと思われる。短大生向けのキャリア教育、あるいはキャリアデザイン教育のための教材開発も含め、目の前にいる学生のレベルやサイズに合わせた教育手法を今後も積極的に試行していきたい。

本稿で用いた、卒業生への聞き取りおよび在学生のキャリア意識調査は、いずれもデータの制約ゆえに、羅列的な記述に終わってしまっている部分があるが、縦断的に調査を重ねることによって、精度を上げることを今後

の課題としたい。

参考文献：

鈴木眞理他編著『生涯学習社会の学習論』学文社、2003
笹川孝一編『生涯学習社会とキャリアデザイン』法政大学出版局、2004
金井千慧子『企業を変える女性のキャリア・マネージメント』中央大学出版局、2003
小杉礼子、堀有喜衣『キャリア教育と就業支援　フリーター・ニート対策の国際比較』勁草書房、2006
カール・ノイマン（監訳、小笠原道雄）『大学教育の改革と教育学』東信堂、2005
橘木俊詔編著『現代女性の労働・結婚・子育て』ミネルヴァ書房、2005
島田晴雄『高齢・少子化社会の家族と経済　自立社会日本のシナリオ』ＮＴＴ出版、2000
渡辺三枝子、E.L. ハー『キャリアカウンセリング入門　人と仕事の橋渡し』ナカニシヤ出版、2001
金井壽宏『働く人のためのキャリア・デザイン』PHP研究所、2002
高橋俊介『キャリアショック』東洋経済新報社、2000
大久保幸夫『キャリアデザイン入門I　基礎力編』日本経済新聞社、2006
Marland, Jr., S. P. (1972) *Career Education Now*, The Vocational Guidance Quaterly, vo120, No3

注：

1）上西充子「大学におけるキャリア支援・キャリア教育に関するアンケート調査」『キャリア研究の到達点と課題、日本キャリアデザイン学会第 3 回研究大会資料集』pp9-12、2006年。国・国公64大学、私立242大学からのアンケート調査紙回収による報告。

調査は2006年３月に実施されたもの。

２）和田佳子・椿明美「新卒派遣社員および新卒契約社員の現状と女子短大生のキャリア支援－エンプロイアビリティ育成の課題－」『ビジネス実務論集』No.22、pp5-7、日本ビジネス実務学会、2004年。調査結果は、北海道内の４短大に所属する女子学生296名からのアンケート調査紙回収によるもの。調査は2003年９月に実施したもの。